

プレス空知 2019年4月

すっかり春らしくなり、北海道の長い冬が終わりを告げそうな日々となりました。4月は、始まりの月で、大学でも新入生を迎えて新鮮な雰囲気になります。今日は、大学での私の教育方針をお話したいと思います。

大学は4年で卒業となるため、私は、4年計画でピアノの実技指導を考えています。新入生は、親元を初めて離れたり、通学に時間がかかるようになったり、寮生活になるなど、生活環境が変化しています。そのため、ピアノの実技のことより、新生活で困っていることはないか、何か相談したいことはないかなど、生活の基礎を築けているかを心配します。親元を離れて、のびのびとしている学生もいれば、ホームシックで意気消沈している学生もいます。また、今まで自宅で練習が出来ていても、アパート暮らしになり、大学の練習室で練習をしなければならなくなる場合も多く、思うようには練習ができないこともあるようです。ピアノ科の学生のピアノ実技レッスンは、個人指導ですので、ドアを開けて研究室に入ってくる場所から、彼ら彼女らの雰囲気で、元気なのか、元気がないのかがわかります。学生たちは、音楽の専門性を学ぼうと意気揚々と入学してきますが、まずは、新生活がその行く手を少しだけ阻みます。私が、19歳でウィーンに留学した時も、実はホームシックで半年は泣いて暮らしたことを思い出します。志を貫くためには、まず、環境の変化に対応して、自分の生活のリズムを整えることから始まります。

大学で専門的に音楽を学ぶということは、音楽のプロになるということを意味します。4年間で自分の音楽を見つけ出し、その音楽の実現のために技術的な訓練を重ねていきます。学生は、教養科目や専門科目、教職科目などの講義を受講しなければなりませんから、それらの勉強の他に、ピアノの練習も毎日欠かさずしなければなりません。1週間に1度、ピアノの個人レッスンがありますが、私は、レッスンの度に具体的な問題点を指摘し、その問題点を解決する方法を示します。1週間、練習し、次のレッスンで問題が解決し、上達していることが実感できると、確実に上手になって行きます。しかし、新入生が、思うように練習時間が取れなかったり、生活上の問題があると、1週間では解決できないこともあります。そのため、私は新入生に限っては、生活の変化に慣れ、リズムがつかめるまで、辛抱強く、待つことにしています。ほとんどの新入生は、半年ほどで、落ち着きが出てきて、ピアノのレッスンにも集中できるようになります。指導者は、少々忍耐も必要になります。

技術的なことは、すぐにはできないこともあります。私は、同じことを繰り返し説明します。学生たちは、頭では理解しても、実際には中々できないことも多いのですが、本人も指導者も決してあきらめないで、練習を続けると、3年生になったころ、突然、頭でわかったことと実際の演奏が結びつき、「できた！」と思えるようになります。つまり、本当にわかるまでには、2年以上の月日がかかるのです。私は、経験上そのことを知っていますので、学生が努力していることが見える時は、焦らずにじっくり取り組みます。3年生になって、学生が本当によい音楽の演奏法がわかった時から、飛躍的に上達していきます。そして、4年生の卒業演奏では、立派に素敵な演奏ができるようになっています。私は、学生一人一人

が、4年間かけてプロの音楽家の基礎ができたことが見えたとき、とてもうれしくなります。